

# 総動員伝道

## 総動員伝道の目標

1. すべての人に福音を伝えよう。
2. すべてのクリスチャンがよいあかし人になろう。
3. すべての教会が成長しよう。

## 21世紀を悔い改めの世紀に

総動員伝道 委員 塩島 光 三



「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか」。

(エゼキエル三三・11)

21世紀も5年を経過しようとしている今日、日本の宣教に新たな指針が示されることを期待し祈る者であります。

そこで過ぎ去りし20世紀を顧みます時、新世紀を迎えるにあたり、科学の発展に限りなき期待を寄せ、希望をもってバラ色の未来を夢見て迎えたように思います。また、「神は死んだ」というニイチエの言葉をもって20世紀が始まったと言えま

しょう。神を捨て自我を中心に据え、理性を第一に科学的な事のみを信じ、進化論を全面的に受け入れ、創造論を神話化し、科学的な結果のみが真実であり真理であると、言う確信のもとに立ち、無神論、唯物論を信条としておりました。

その結果、ロシア革命、2次に亘る世界大戦を通して人類史上類を見ない多くの人の血を流した世紀であり、しかも第二次世界大戦後、今日に至るまで血を流し続け、倫理道徳は退廃し殺人的な事柄は世界中で一般化しております。

この様な20世紀を顧みます時、神の前に大罪を犯し続けた世紀であったと言えましよう。その意味でも神の審判の世紀と言えらると思えます。

この20世紀を終える頃には、近代化学兵器の拡散、核による恐怖に怯えています。広島、長崎に原爆が投下された当時は、世界中に存在した原爆の数は5、6個に過ぎなかったのですが、今は地球を370回、380回も破壊することが出来る数の原水爆があり、その上自然環境の破壊から生じたおびただしい飢饉に苦

しむ難民がいます。

迎えた21世紀もますます混迷の度合いを深め、世の終わりを感ずる今日です。再臨の近いことを悟ります。

生きておられる神は、「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ」と言っておられます。さらに「悔い改めよ、立ち返れ」と呼びかけてくださっています。この呼びかけを具体化するためにひとり子なるイエスを人としてこの世に遣わし、私たちの罪をその身に負わせるために十字架におかけになったのです。それ故に私たちの罪は赦されるのです。

この神のみ旨を成就するために主イエスさまは卑小なる者として誕生し、私たちの罪と咎を担われ、十字架にかかられ、救い主としての務めを全うされました。

この主イエスさまは、人としてこの世に遣わされ、初めて福音を語られた時、「悔い改めよ。神の国は近づいた」と言われました。

今こそ、神を冒瀆し、自我に生き、理性に基づく大罪を悔い改め、「立ち返れ、立ち返れ」と言われる神の愛に応答すべき時ではないでしょうか。悔い改めをまず教会から行なうようにと求められていると確信いたします。そのための活動を総動員伝道は果たしていかなければならないと強く感じています。

自分に出来ることを

マルコ十四章にイエスの頭に香油を注いだ女性のことが記されています。イエスは彼女の行為を「りっぱなこと」(6)をしてくれたと評価し、「自分に出来ることをしたのです」と言われました。

伝道はそれにふさわしい賜物が与えられている人がすることであって、ごく普通の人にはとても出来ることではありません、と伝道することを避けている方がおられるように思えます。

確かに賜物が与えられてるなあと思える人がたくさんいます。他人と話をすることが楽しい。訪問することが一

伝道メモ

56



向に気にならない、疲れない、緊張しない。では賜物がなければ「しなくてもよい」ものでしょうか。主はすべてのクリスチャンが主のよい証人になることを願っておられるし、賜物を求めるようにと教えています。

あなたが他人に話すのが苦手ならば、話すのが上手な人に会わせるようにすると良いでしょう。またテレビやラジオで話の上手な方が話をしているので、その番組を教えてあげれば、あなたが話す代わりをやっていただけでいいでしょう。またそれを文書にするのが得意な

方が文書やトラクトにしていますので、それを手渡せば、その文書があなたに代わって福音を伝えてくれます。

伝道は難しい、私のような者には不向きなことだと勝手に決めないでください。主のために少しでもお役に立ちたい、主にお仕えしたいという気持ちがある、思いが大切です。それがなければ、自分の救いについてもう一度吟味した方が良いでしょう。救われていることが真実であれば、伝道の賜物があるなにかかわらず、お役に立ちたいと思うものです。

その思いに押し出されるようにして「自分にできること」を探します。は

がきを書くことを思いつくでしょう。その一枚が人を励まし、支えるのです。隣の家の郵便受けに教会案内をお届けする、教会で開催される催物に誘ってみる、お茶の時間を作って自宅に招いてみる、病院を訪問する、手助けの必要な人にちよつと声をかける、いろいろ思いつくでしょう。いますぐあなたにできること、それは祈りです。あなたが思いつくすべての人を祈りに覚えましょう。主はあなたの祈りに耳を傾けてくださることでしょう。あなたに出来ることから始めてみてください。



(信徒のためのセミナー)

小助川 次雄

終わりにあたって

随分長い間、拙稿を掲載していただきましたが、今回をもって、終わりにさせていただきます。

講演ですと、『ご静聴ありがとうございます』『ご静聴』はあっても、『ご精読』はみあたりませんので、戸惑っています。

お読みくださった方がどれだけいらっしゃるかは分かりませんが、心から感謝したいと思えます。どんなことでも、ご感想やご意見がありましたら、ぜひ、向学のために、お教えいただきたいと思えます。

要点は次のようなものでした。

一、教会形成(成長)は神のみこころである。それゆえに、教会形成に励むことは、この上ない喜びであり、特権である。

二、教会形成の過程、パターン、要因について。神のみわざの多様性を見ることは大きな喜びである。

三、教会形成と信徒の関係について。信徒として生かされ、用いられることの喜びを知る。

四、教会形成(成長)と牧師の関係について。その責任は、大きく牧師にかかっている。それゆえに、牧会者とともに労することは大きな喜びである。

五、教会形成(成長)と役員について。教会の役員やリーダーは、本質的には神に仕え、実際的には神の教会(信徒の共同体、家族)に仕えているのである。良い役員とともに労することは、大きな喜びである。

六、教会形成(成長)を妨げる要因について。辛いことであるが、吟味して「妨げ」となっていることを改めることは成長につながり、大きな喜びとなる。

七、教会形成(成長)の実践プログラム。そこには、実践と結果を見る喜びが待っている。

以上が、各課の見出しと喜びのポイントでした。特に、第七の実践プログラムについては、宜しかったら同名の拙著『教会』を建て上げる喜び(いのちのことは社発行。総動員伝道版)もありません。ぜひ、ご利用ください。皆さまの各教会が、いよいよ祝福されますようにお祈りいたします。

◆南原繁と日本宣教

順天堂大学 医学部

病理学 教授 樋野 興夫

世のすべての営みには「発展と衰退」の繰り返しがあることは歴史が物語る。「バクテリアの増殖」のサイクルは「発展と衰退」を科学の言葉を持って具象化して、我々に説明してくれる。第1段階・誘導期、第2段階・幾何級的に増殖する時期、第3段階・静止期、第4段階・自己融解期。いかなる組織も、同様の法則が成り立つのではなからうか。

「バクテリアの生き残り」は、(1) 培地を新鮮なものに取り替えるか、(2) バクテリア菌を入れ替えるかである。まさに「旧約」から「新約」へである。常に原点を確認し、進むべき方向をしっかりと見据えたいものである。

2004年11月20日の南原繁没30周年記念シンポジウム「南原繁と現代——今問われているもの——」(学会館)は、会場が満員となる盛会であった。今年、11月26日第2回南原繁シンポジウム「南原繁と戦後60年——初心を忘れたか——」(学会館)が企画されている。戦後最初の東大総長南原繁の復権の予感を感じ

じるのは、筆者のみではなからう。憲法および教育基本法改正の動きが活発化している今日において「南原繁をして今日あらしめば」との切なる問いかけからであろう。「初心を忘れたのか!」との叫び声が高らかに聞こえてくる。

内村鑑三、新渡戸稲造の2人を人生の師に持つ南原繁(1889—1974)は、何とスケールの大きい人物であったことか。人は、誰を尊敬しているかによってその人物の本質が知られよう。ここでは、あえて、具体的な内容には触れない。下記の参考文献を直接、手に取って読んで頂ければ幸いである。

筆者は、若き日、南原繁を尊敬する人物との「人生の扇の要」となる出会いを与えられてから、はや30年の歳月が流れた。感慨深いものがある。「南原繁著作集」(全10巻)を、全部神田の古本屋で購入した。この30年間の断片的な読書を、秋の夜長に徹底的にもう一度読み尽くすつもりである。

まず、終戦後、東大総長として1946年(昭和21年)に行った数々の演述などを改めて読み返してみた。2月11日の「新日本文化の創造——紀

元節における演述」、3月30日の「戦歿学徒を弔う——戦歿並びに殉職者慰霊祭における告文」、4月29日の「天長節——記念祝典における演述」、11月3日の「新憲法発布——記念式典における演述」などである。

第9巻の『日本国憲法』の章は、深くきつちりと読むべき、歴史的な、今に生きる内容である。ここでは、あえて、具体的な内容には触れない。世に発言する前に、この南原繁の文章は秋の夜長の読書にふさわしい。

また、「南原繁全集」第1巻の補論に「カトリシズムとプロテスタントイズム」が収められている。この文章は、これからの日本における教会のあり方を考える上で、大変示唆に富むものであると、一読して感銘を受けた。広く日本のクリスチャンに秋の夜長の読書として勧めたい文章である。

『いま、わが国に欠けているのは、なかならずく現代を担う青年・学徒の心に訴える、そうした理想と、それから生じるヴィジョンと情熱である』(南原繁)の言葉が静思される今日このごろである。まさに『今の世にも欲しいと思う』人物である。

あらゆる分野で「初心を忘れ」方

向性が失われつつある時、「静思から得られた結論」を語れるようにになりたいものである。

参考

- 樋野興夫…『われ21世紀の新渡戸とならん』(イーグレープ刊)(2003年)
- 樋野興夫…『がん哲学——がん細胞から人間社会の病理を見る』(De出版)(2004年)
- 樋野興夫…『がん哲学への道——吉田富三に学ぶ。』現代に求められる教養を問う、(鴨下重彦 編)(De出版)(2005年)
- 樋野興夫…『なぜ南原繁か?——が哲学。』南原繁と現代(南原繁研究会 編)(De出版)(2005年)
- 樋野興夫…『われorigin of fireたらん——がん哲学余話』(to be出版)(2005年)

「われorigin of fireたらん」

定価700円

購入なさりたい方は

ファックス0424-93-6520

e-mail sub@21o-be.jp

でお知らせください。

秋の伝道研修会の報告

9月16日(金)、総伝事務所において秋の伝道研修会を行った。講師は趙南洙師(日本同盟基督教団・川崎招待キリスト教会牧師)、題は「韓国の宣教師から見た日本の教会」。



趙南洙師

趙南洙師はソウルで開拓伝道をしてきたが、1990年神に召され日本にやって来た。そして開拓を始めたのが現在の川崎招待キリスト教会である。趙師は日本宣教について次のように話した。

①日本の教会は変わらなければならぬ。変わらなければ何も起こらない。牧師もリーダーも変革が必要。社会は大きく変化している。たとえばいまだにスリッパを履く教会があったり、婦人会等の名称を使っているのもそうである。変わっていけないのは福音、変わっていいのは何か。もっと研究が必要である。

②救霊、弟子作り。招待キリスト教会の柱は「救霊」と「弟子作り」である。すべてのイベント、行事を「救霊」に関連させ、信徒の目を魂の救いに向けさせる。伝道指向。そのために弟子訓

練、リーダー訓練をする。しかし最高の訓練・教育は牧師が祈り、デイブーション、個人伝道などにおいて良き手本を見せることであるという。これ以上の訓練・教育はない。趙師は自分のデイブーションノートや1週間のスケジュール表を信徒に見せるそうである。要は、信徒を整え、個人伝道でできるようにすることである。

③礼拝が変わるべき。プロテスタント教会はどうしても教えることに重きを置きがち。しかし礼拝は捧げるもの、神との一体感である。メッセージ中心ではなく、信徒が神に捧げるもの。日本の教会は礼拝内容を変えらるべきである。会衆賛美の在り方などもっと研究が必要。「きょうも礼拝が守られて良かった」ではなく、「きょう礼拝に出られなくて残念だった」と思えるような楽しく、充実した礼拝でありたい。

④セルチャーチの設置。魂の救いを第一とし、7年前から準備してきたセルチャーチを最近教会に適応した。セルチャーチとは「家の教会」という意味で、信徒が自分の家を開放し、集会などを開き、そこに未信者の方を招くという伝道方法である。そのための体制作りと、リーダー養成も行う。日本の宣教は大きなイベントを行うよりも、信徒一人ひとりがゲリラ的伝道、口コミによる伝道を行う方が確実に有効である。

⑤献身者が起こされること。今までに川崎招待キリスト教会から8人の献

身者が起こされた。教会は次代を担う献身者を育てるべきである。また教会に仕える信徒献身者も必要である。

⑥18の課題・提案。最後に趙師は日本の教会への課題・提案として18項目を挙げた。ポイントを記す。なぜ単立教会が多いのか。教会数は少ないのになぜ教団が多いのか。総じて互いに非協力的である。スリッパ文化は変えた方がよい。神を賛美する賛美歌、聖歌がなぜ一つになれないのか。なぜ会員制でなければならぬか。もっと緩やかにし、海外で洗礼を受けた帰国子女を迎え入れやすくすべきである。牧師は一生継続した学びが必要である。なぜ牧師は引退できないのか。後継者育成が必要である。日本の教会はもっとアフリカ教会、アジア教会に学んで欲しい。日本の教会は実践神学に力を入れて欲しい。教会のイメージ改善が必要である。

報告 住吉英治



(1月の大嶋師の研修会とともに、今回も教えられることの多い、充実した研修会となりました。資料、テープがありますので総伝事務所の方にお申し込みください。)

●ご支援、感謝いたします。

暑かった夏も終わり、収穫の秋を迎えました。各教会でも秋の特別伝道集会がもたれることでしょうか。蒔かれた種、お世話をして育ててきた穂、いよいよ刈り入れです。説教者の勧めに応じて、主を信じる決意を、アンケート、挙手や起立、あるいは前に出てくるという形で表明していただきます。最後のとどめはやはり「個人伝道」でしょう。総動員伝道の「大いなる救い」という小冊子をご活用ください。フォローアップのためには「豊かな生活」という小冊子が有効です。いずれも1冊100円です。ご注文ください。

8月会計

収入	289,590
活動費	36,552
ニュース印刷送	133,543
部屋代	196,026
人件費	0
積立	10,000
支出計	376,121
累計	-288,780

2005年11月1日発行  
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1  
OCC、614号室

総動員伝道  
03-3291-5035  
03-3291-5266  
Eメール sodoin@ybb.ne.jp  
ホームページ  
http://www.gospeljapan.com/sodoin/  
振替 00140-1-107255  
代表 姫井 雅夫  
編集 住吉 英治  
定価 1部10円 (送料別)  
印刷 新生宣教団 (2,500枚)